

各校ページ【立教池袋中学校・高等学校】

## さて、ワーグナーはどうだったのか

立教池袋中学校・高等学校チャプレン マーク・シュタール



著名な作曲家は皆、教会音楽を作りました。大礼拝、聖歌、頌歌、コラール、偉大な作曲家達はこれら作曲のレパートリーに入れていました。『戴冠ミサ』(1779)は、モーツァルトの最もよく知られた教会音楽です。ベートーベンの『ミサ・ソレムニス』(1822)も傑作です。ベートーベン自身、自分の最大の功績だったと考え、楽譜の冒頭に「心から心へ届くように」と記しました。シューベルトの教会音楽も有名で、今日も世界中の教会で多く用いられています。

では、ロマン派の代表ワーグナー(リヒャルト・ワーグナー、1813-1883)はどうだったのか、ワーグナーの大ファンとして調べてみました。端的に言えば、ワーグナーは教会音楽を作らせませんでした。短いコラールは存在しますが、それが教会用だったかどうかは議論の余地がありそうです。ワーグナーは、オペラにほとんどの精力を傾けました。そして、どのオペラも作曲のみならず、台本も手掛けたのです。それは、今も昔も稀なことでした。また、彼は多くのエッセイも残しました。彼の後継者たちのためでもあり、副収入を得るためでもありました。これらのエッセイは異彩を放っていましたが、様々な形で彼の人生において、また死後においても問題の火種となりました。天才的な音楽家でありながら、ワーグナーは、その荒い気性や慢性的な借金問題、ニーチェとの関係、反ユダヤ主義、社会主義者による死後の引用などで名声に傷がつかしました。しかし、ワーグナーは、教会音楽を残さなかったとは言え、彼の残した功績と影響力には疑いの余地がありません。

ワーグナーが教会音楽を作る必要性を感じなかったからと言って、彼がクリスチャンと

してのルーツを完全に捨てていたわけではありません。実際、彼が老いと共に少しずつそのルーツに思いを馳せる姿を見ることが出来ます。まず、スイスに亡命していた1854年に、ワーグナーはアーサー・ショーペンハウアーの哲学と出会います。後にワーグナーは、ショーペンハウアーの哲学との出会いは、人生で最も重要な出来事だったと回顧しています。それまで彼は、オペラにおいて、ストーリーこそが最も重要な要素だと考えていました。しかし、ショーペンハウアーの考えは違いました。彼は、人間を悲観的に見ていた一方、音楽こそが人間の芸術として、最高峰のものだと考えていました。音楽とは、人間を直接的に表現するものであり、人の衝動を完全に代弁するものだと考えていました。このショーペンハウアーの考えとの出会いは、ワーグナーがより一層、音楽に向き合うきっかけとなりました。オペラのストーリーを軽視するわけではありませんでしたが、彼にとっては、音楽に次ぐ二次的なものとなりました。ショーペンハウアーの音楽は人間の意志を最大限に訴えるものだとする考え以外にも、ワーグナーが受けた影響がありました。仏教やバラモン教など他宗教に対するショーペンハウアーの考察もワーグナーに影響を与えました。

ショーペンハウアーを通して世界の他宗教を知ったことで、ワーグナーはそれらの教義について深く探究する機会を得ました。それは、ルター派の背景、教義、権威はさておき、ワーグナーが自分の基本的なキリスト教のルーツに立ち返る機会となったはずです。彼は、イエスの生涯と教えに関する3つのことを重視しました。1つ目は、イエスの清貧

の生活です。家もなく、家族から離れ、所持品もなく、村から村へ、家から家へと人々に神様との関係を結ぶことを説いたイエスの姿です。2つ目は、死です。イエスは自ら進んで人間の贖罪のために死を受け入れました。3つ目は、イエスの教えです。隣人愛、慈悲、憐みです。ワーグナーにとって、これらのイエスの生涯のテーマは、音楽や台本を作る上で、常に影響がありましたが、特に晩年の作品は、それが顕著に表れています。そして、最も「キリスト教のテーマ」が色濃く表れているのが『パルジファル』(1882)でしょう。

さらに、『パルジファル』が完成した頃に書かれたワーグナーのエッセイ群は、彼自身がキリスト教のルーツにしたいに立ち返っていく様について考察するものでした。『宗教と芸術』(1880)や『英雄精神とキリスト教』(1881)などです。『宗教と芸術』の初めにはこう述べています。「宗教が虚構になったなら、芸術が宗教の精神を守る役目を果たすと言えるかもしれない」。人生のこの段階で彼が言いたかったのは、キリスト教否定ではなく、信仰をより人間的に芸術を介して、違う角度からとらえなおすということでした。

では、どのような経緯でこの時期になって、急速にキリスト教に焦点を当てて、ワーグナーは『パルジファル』を生んだのでしょうか。簡単にあらすじを見てみたいと思います。聖杯の聖所には、聖槍によって不治の傷を負った年老いた王がいました。イエスが十字架にかかった際にイエスの体を刺し貫いた聖槍です。預言によると、純真な若者によってのみ、その傷が癒えるというのです。その傷を負わせた「悪者」はその若者を殺そうと試みますが、メッセンジャーが現れてそれを阻止し、若者の名はパルジファルだと告げます。自分の名を告げられ、若者は急に王の痛みを自分のものと感じ、憐みます。「悪者」

が聖槍をパルジファルに向けて放つと、パルジファルはそれを掴み、「悪者」とその帝国は滅びます。長年さまよった後にパルジファルは聖杯の聖所に辿り着き、まずメッセンジャーに洗礼を授けます。するとにわかに関の輝くばかりの美しさに驚き、それは受苦日の魔力だと教えられます。パルジファルが王の傷に聖槍を当てると、たちまち傷は癒えます。パルジファルは聖杯を取り出し、聖槍と揃えると、その王国は輝き、活気を取り戻したのでした。

この簡単なあらすじを読むと、一貫して共感、贖い、憐み、そしてはっきりとしたキリスト教の象徴(聖槍、聖杯、受苦日)が『パルジファル』に盛り込まれていることがわかります。ワーグナーにキリスト教の影響がどの程度あったのかは、常に論争的でした。しかし、教会音楽こそ、ワーグナーは作曲しませんでした。ショーペンハウアーに影響を受け、晩年、遺作となった『パルジファル』を残しました。そこに見られるのは、まさにイエスの物語を時に伏線として、時にははっきりとした象徴として表した作品です。見方によれば、ワーグナーは自身の贖いとして、このオペラを作ったのかも知れません。その動機がいかようでも、この作品が私たちそれぞれに意味を持って迫ってくることに違いはありません。

